

子供の目で見た敗戦と母の苦勞

東京都 山田節子

一 敗戦までのこと

私の父が満州に渡ったのは、昭和九（一九三四）年であつたと思う。満州事変勃發直後、日本が彼の地の權益拡大を目指して突き進んでいくのと同時に設立された、満州航空会社のパイロットとして渡満したのだ。会社は各地に飛行場があつたようだが、父の最初の勤務地は遼寧省の錦州であつた。家族は父と母と当時五歳だつた姉の三人であつた。私はそこで昭和十年三月に生まれた。翌年には承徳に転勤している。年子の妹はそこで生まれた。

錦州も承徳も記憶には全くない。父の撮つた写真が何枚か残っている。正月に錦州の自宅の前で写した写真や、承徳で小学校に上がった姉の運動会の写真などである。

私が小学校に入学したころは、奉天に住んでいた。昭和十六年のことで、その年に一番下の妹が生まれ、十二月

八日が太平洋戦争の始まりであつた。

小学校は、私たちが入学するとき国民学校と名前が変わつていて、私たちも小国民と呼ばれて教育された。十二月八日の朝礼のときの、校長先生の話というより緊張された姿が忘れられない。まだ一年生であつたが、非常事態を察したのだと思う。

それから終戦までの四年間は、銃後を守る小国民としての生活を強いられていた。「欲しがりません勝つまでは」の標語を地でいくような毎日である。食料については特に不自由を感じたことはなかったが、靴とか衣料品は配給制で、なかなか手に入りにくかつたようだ。

昭和二十年には五年生になつていたが、学生生活は軍隊式で、学級は中隊、班は小隊と呼ばれ、教育勅語を暗誦させられていた。

父は、戦時中は軍属として満州と日本を結ぶ航空路を、要人を乗せて往復していた。また、満州国内を縦横に飛び回っていて、現在のモンゴル地区や佳木斯・牡丹江・ハルビンなどの飛行場にもよく出掛けていて、家にいることは滅多に無かつた。一度辺境に不時着したことがあつて、母が

相当に心配していたことがあった。でも、その後無事に帰って来てほとしたことを覚えている。若い航空兵の教育・訓練にも当たっていたようで、若い人たちが家に入入りしていたし、父のことを教官と呼んでいたのを記憶している。

八月九日のソ連参戦があった翌日、父が早めに帰宅をして、「明日から出張で遠くへ行くので、当分帰れない。母の言うことをよく聞いて、何があっても家族が離れないように」と言ってお掛けた。行つた。

十五日の玉音放送は、私たち姉妹四人が母を困むようにして聞いた。ラジオから流れる言葉は、子供の私には全く理解できなかったが、母がポツンと「戦争は終わった」と言った。私は、なぜ神風が吹かなかったのか疑問に思っていた。父がいなくてどうなるのかと思つたが、その日の夕方、父はふらつと帰つて来た。十五日当日も飛行機に乗つていて、奉天の飛行場に降りたら、既にソ連機がいたということだ。今思うと、どうやって帰つて来たのか不思議で、そのことを聞いておきたかと思つた。ほとんど奇跡に近いことだつた。

父はその日から一步も外に出ず、精神的な打撃の上に

肉体的にも無理が重なつて来たのか、たちまち半病人となつてしまつた。

二 敗戦後の奉天での生活

母を始め、私たちの苦難はそれからが始まりだつた。翌日ぐらいから、通りをソ連軍の戦車がゴウゴウと音を立てて行進して来た。車上には自動小銃を構えた坊主頭で赤ら顔のソ連兵が乗つていて、窓のカーテンの隙間から覗いているだけでも恐ろしい光景であつた。

日が経つにつれて、昼間は外にも自由に出入りできるようになつたが、夜は怖かつた。ソ連兵が四、五人の集団で強盗に入つて来るのだ。父や母に銃を突き付け、「ダワイ、ダワイ」と金品を要求するのだ。彼らのほしかつた物はお金、時計、カメラ、貴金属、高級食器、高級衣料であつた。初めのうちは出す物があつても、たびたびの侵入でめぼしい物は無くなつてしまふ。すると彼らは、押入を引っかき回し、タンスや机の引き出しをひっくり返して探すので、彼らの去つた後、家の中は足の踏み場も無い状況であつた。

そういう中で一番心配されたのは、女学生であつた姉の存在であつた。若い女性が連れ去られたり、暴行を受け

たりするのを防ぐため、当時は若い女性は髪を切り男の服を着たりしていた。私の姉も頭を丸坊主にし、父のつなぎの飛行服をすっぽり着て生活していた。ソ連兵が扉をどんとんと蹴って入って来るのが分かると、姉は急いで押入の中から天井裏に逃げ込み、彼らが帰るまで息を潜めていたのである。私と二人の妹は、怖いからといって声を出したり泣いたりすると銃を向けられるので、ただただ部屋の隅にじっと固まっていた。ソ連兵の腕や足首には、時計がいくつもはめられていたことを今でもよく覚えていいる。

ソ連兵の家宅侵入はどのくらい続いただろうか？ もう家の中にはめばしい物はほとんど無くなっていった。

奉天に駐留しているソ連軍の規律もだんだん良くなっていて、秋ごろにはやっと落ち着いた夜を迎えることができるようになった。

さて、父が働けなくなって収入が無くなったので、何か収入の道を考えなくてはならなかった。ほとんどすべての日本人がそういう立場にあったわけだが、今までの中国人と日本人の立場が逆になったということであった。

我が家の場合、社宅に住んでいたのだが、とにかく住む

家があったということは幸いであった。それまでの日本人は、露天で物を売るといふようなことは全くなく、それは中国人のすることであったのだが、敗戦を境に日本人も手取り早い露天商を始めたのである。まずは売り食いである。母もそれを考えたのだと思う。食へ物が一番売れるということ、母が考えたのは稲荷寿司を売ることであった。

机の引き出しを寿司の箱にした。作った稲荷寿司を箱に並べ、ガラスの蓋をしてから紐で肩から掛けるようにして繁華街に立つと、たちまち売れるのである。私と妹はそれが面白くて、売り子をやらせると母にせがんで、学校から帰るとすぐに二人で箱を一つ持って繁華街に行き、結構売り上げた。

満州の寒さは早くやってくる。秋も深くなると、稲荷寿司は冷たくて売れなくなる。そこで母が考えたことは、露店でコロッケを揚げ、熱々を売り物にすることであった。リヤカーに石炭ストーブを取り付け、大きな中華鍋で揚げながら売るのである。この商売は大当たりで、行列ができるほどであった。しかしこのコロッケ屋は、コロッケを作るのが大仕事であった。ジャガイモを茹でて潰し、肉やニンジン、

玉葱などを炒めて合わせ、形にしてその後衣をつけるという面倒な手順が必要なのだ。

寝たり起きたりの父であったが、家にいる父がジャガイモを煮たり潰したりの作業をし、夜、母が形にして箱に並べておく。翌朝、私たちが学校に行く前に家族全員で小麦粉をつけ、溶き卵にくぐらせ、パン粉をつけるという流れ作業をやった。一日何十個、いや何百個作っただろうか。大変な仕事であったが、今思い出すと懐かしい。

当時、奉天の町の中は北満の方から避難して来た人たちでいっぱいだった。大人も子供もすっかり打ちのめされ、髪はぼうぼう、着ている物はぼろぼろであった。ひどい人は腰を荒縄で縛っているだけの姿であった。とても同じ日本人とは思えない、哀れな姿であった。いわゆる国策として、ソ満国境の地域に入植させられていた開拓団の人たちだったと思う。この人たちがコロッケ屋の前に並び、一個の揚げたてのコロッケをほおぼる姿は、十歳の私にも胸が痛くなる姿であった。

学校といえは、私たちの高千穂国民学校は、終戦と同時にソ連軍の兵舎となり、二度と入ることはなかった。赤

い煉瓦造りの二階建てのすてきな校舎で、校舎内は水洗トイレ、スチーム暖房完備であった。私は現在の東京駅を見ると、この校舎を思い出すのである。

昭和二十年九月のころに、学校再開の連絡が入った。校舎が無いので、学年によって集まる場所が違っていた。だから、五年の私と妹とは別の場所に行ったと思う。私は、初めは天理教の教会であった。広い座敷に細長い机が並べられていた。四年、五年、六年と仕切って授業が行われていた。今まで一緒にいた友だちは少ししかいなくて、ほかの学校や地域から来た子供が多くいたように思う。教科書はほとんど使わず、私の場合は算数ばかりやっていた。今思えば、きっと担当した教師が数学の専門だったのかもしれない。私の数学好きは、このとき培われたようだ。その後、「生長の家」の座敷でも勉強したことを覚えている。六年生になったころ、何かの会社の倉庫のような所が学校となり、そこには学校の机や椅子が運び込まれていて、学校らしい体裁が整っていた。私はここで、北満の方から移って来た以前校長先生だった教師に指導を受けたが、今でも忘れられない事柄が幾つか残っている。彼は、日本

は戦争に負けたので、これからは新しい国造りをしていかねばならず、そのためにはみんなよく勉強しなければならぬ。特にこれからは男女が平等になり、女子も男子と同じように代議士や大臣になることができる世の中になる、というようなことをよく話した。後から考えると、日本国憲法の中身に關わる民主主義とか男女同権とかいう内容である。当時十一歳の私には、それがとても新鮮で、将来は女代議士になろうね」と約束し合ったものだ。今思うとおかしいが、当時としては軍国主義一掃の中で、新しい生き方を求める少女たちが誕生していたのだと思う。

その教師には、一学期しか教えてもらわないうちに別れることになった。引揚げが始まり、帰国してしまったのだ。この教師とは、後々日本に帰ってから手紙のやりとりをした。

二学期からは、担任になった教師が音楽の専門だったせいか、音楽に熱心で歌を歌ったり踊ったり時間が多く、声が良いといわれた私はすっかりその気になり、将来はオ

ペラ歌手になりたいと歌ばかり歌っていた。

数学といい音楽といい、また新しい主義主張などにすぐ影響される子供時代は、外地における敗戦国民、混乱した生活の中での唯一の彩りであった。こういう生活は昭和二十二年八月まで続いた。私は中学一年生になっていた。

当時奉天にいた日本人には、昭和二十一年の春ころから引揚げという日本への帰国が始まっていて、北満の方から移動して来た人たちが一番早くにいなくなり、次第に自分たちの周りの友人、知人宅の人たちが帰って行く状態であった。私の家族はというと、父の病状が悪化して昭和二十一年八月十日に亡くなっていた。父は敗戦となった外地で、まだ三十八歳の妻と四人の娘を残してこの世を去ったのだが、どんなにか心残りであったかと思う。滞空何千時間というパイロットとして、誇りある業を成し遂げた人としては、あまりにもあつけない死であった。私たち家族が死の床の父を囲んで泣いている姿が、一枚の絵のようにはっきりと思い出される。病名は後で知ったが、肺核であった。この病名は、この後母を苦しめ、一番下の妹の命をも縮めることにもなったのである。父の遺体を、母が

リヤカーに積んで焼き場に運び、夕方お骨にして帰って来た。宗派は違うけれど、近くに住む僧侶に経をあげてもらった。それだけでも幸せというご時世だった。

ちょうどそのころ、社宅の家族の帰国が決まっていたのだが、私たちは父のことがあって帰ることが叶わず、次の機会を待つことになった。仲良しの友人も、このとき帰国した。

父が亡くなり、社宅の人たちも引き揚げていなくなっていたので、私たちも住む場所を変えることになった。姉が結婚することになった。家族に若い男性がいることが、とても力強く感じられたことを覚えている。義兄は私たち姉妹をよくかわいがり、その後の引揚げのときにはなくてはならない人であった。そのころは母は露天商をやっておらず、日本人で奉天に残って会社や工場などで中国人に技術指導したりする残留者の、若い人たちが住む寮のような所の賄婦として働いていた。姉は女学校を卒業して、奉天の居留民会のような所で働き始めていた。私とすぐ下の妹は学校へ通い、一番下の妹はいつも母のそばにいた。そのころ親しく付き合っていて、いつも親切に私たちをかわいがっ

てくれた中国人に、次のようなことをよく言われた。「日本は戦争に負けて、国土は空襲でめちゃくちゃになっている。お父さんもないし、日本に帰っても生活していくのは大変なことだ。お母さんは大変だから、四人子供がいるんだから子供二人を私の所へ置いて行きなさい。お姉さんは長女で家を継がなくてはならないし、一番下のまっちゃんちゃんは、まだ小さくてお母さんが必要だけど、せつちゃん(私のこと)とあきちゃん(すぐの妹)は中国に残って、私の家の子になるといい」と、母も説得されたし、私と妹は物やお菓子などたびたび持参して来ては誘われた。その中国人は洋服屋さんだったので、私と妹には服まで作ってくれたりもした。私たちはその中国のおじさんは大好きだったけれど、どうしても中国に残りたくない、誘われるたびに断り続けた。もちろん母はそんな誘いを無視していた。私と妹は、もしこのときもらわれていたら、後年大量に発生した中国残留孤児の一員となっていたと思われる。

父の死後から翌年八月の引揚げまでの一年間は、寂しくなかったが平穏な日々であった。中学一年と小学校五

年になった私と妹は学校に通っていたし、母と義兄が働いていた。

三 引揚げ

昭和二十二年八月、遂に私たちの引揚げのときがきた。嬉しいような不安なような、複雑な気持ちだったことを覚えていいる。家族それぞれに荷物を持つのだが、持ち帰りたい物はたくさんあるが、携帯許可基準というものがあつた。子供が背負うリュックサックには、大した物は入らない。それでも、私などには身に余る大きなリュックサックに思えた。持ち帰れない物で一番残念に思った物は、アルバムに貼つた写真であつた。父はカメラが趣味だったので、我が家には家族を記録した写真がアルバムになつてたくさんあつた。それは、すべて持ち帰つてはいけないと言われた。中国の風景が写っているし、収容所では検査があると言つた。でも、私はとにかく父や母、そして自分たちが写っている写真の何枚かは、どうしても持って帰りたい。私は一人でこっそりとアルバムから写真をはがし取る作業をし、それを紙に包んで私のリュックサックの一番底に入れ、このことはだれにも言わないことにした。収容所では検査は無

かつた。これらの写真は、今でも私の手元にある。写真の裏には、アルバムの黒い台紙の跡と、几帳面な父の字で年月日や家族の年齢などが書き込まれている。私のリュックサックには、この写真のほかに父の遺骨も入れられていた。リュックサックに入れるため遺骨を細かく砕き、小さい包みにして、私は父を背負つて日本に帰るのだと、少し高揚した気分の子十二歳だつた。

確かな日は覚えていないが、七月末に奉天駅に近い収容所に入り、四、五日収容された後、奉天駅から列車に乗つた。石炭などを運ぶ無蓋車だつた。行き先は、船の出る葫蘆島という所だ。途中、私が生まれた錦州という所を通過したが、特別の感慨は無かつた。列車は走つたり停まつたり。日が照れば暑く、トイレが無いので、貨車の中に囲いを作つて仮設のトイレにしたり大変だつた。そのうち雨が降りだし、持ち込んでいた布団や毛布が濡れ、悲惨な状態であつた。この後、屋根付きの列車に乗り換えたが、荷物運搬の貨車なので窓が無く、昼間は扉を開けて男の人がその側に座り、私たちは奥の方でじつと座り込んでいた。

二、三日で葫蘆島に着いた。港には既に日本の船が入っていた。それは、真っ白い船体の一番上に赤十字のマークが入った、眩しいばかりの病院船であった。私たちは列車から雨に濡れた荷物を持ち出し、それを岸壁に並べて干したり、髪をとかしたり、八月の明るい太陽のもと、久しぶりに解放されたひとときを過ごした。

この引揚げのとき、母は今までの無理がたまったのか、病人同様であった。下の妹も具合が悪かった。貨車での移動も二人には過酷であったと思う。病院船に乗って以後は寝たきりとなり、私とすぐ下の妹は、二人で寄り添ってすべてに耐えるしかなかった。

乗船するとき、船の甲板には白い帽子と服の看護婦さんが、大勢並んで手を振ってくれ、船に乗ると「皆さんご苦労でした」と声を掛けてくれた。今思うと、大人も子供もふっと体から力が抜け、放心状態ではなかったかと思う。こうして私は、生まれ故郷の中国を後にしたのだ。

三日間の船旅は、日本に帰れるという喜びとは裏腹に、かなり厳しいものであった。出航して外洋に出てからは船

の揺れが激しく、ほとんどの人が船酔いにかかった。船室では毛布など敷いて皆横たわっているのだが、嘔吐する人でひどい有様だった。私たちも、多間に洩れず、食事など一切摂れず、青い顔をして横になっているばかりであった。

多少揺れが納まっているときに甲板に出るのだが、青い海以外何も見えず、船独特の強い匂いにまた吐き気が戻ってくるという状態で、私はただただ苦しかったことだけを覚えていく。

それでも、「日本が見えてきたぞー」という叫び声に甲板に出てみると、行く手の海上に点々と緑の島々が見え始め、それは五島列島であつたらうか、まさに日本の島々であり、その鮮やかな緑に胸がじーんとしたことを覚えている。中学一年であつたが、生意気にも「国破れて山河あり……」とつぶやいていた。

とうとう日本に帰って来たのだ。昭和二十二年八月初旬だったと思う。

船は九州佐世保の港外に停泊して検疫などが始まった。健康な人は全員検査を行うため、しばらく船に留め置かれた。母や下の妹のような病人たちは、小さな舟艇が迎

えに来て、早々と上陸して行った。

檢疫も無事終わり、いよいよ上陸のときがきた。港には私たちの船のほかにも引揚船が何隻か見え、遠くから見ていたときは、船の上に茶色い材木が積まれているのかと思っていたが、近づいてみると何と裸の兵隊さんたちが、甲板にびっしり並んでこちらを見ているのだった。戦争が終わって、戦場だった東南アジアの方面から復員して来たのだろうか。改めて戦争終了を認識した思いであった。

佐世保港に上陸した後、行列させられ、荷物と一緒に全身にDDTを散布された。私たちは蚤一匹、虱一匹シラミ持つていなかったのだが、ひどい消毒方法だった。

港から収容所まではかなり歩かされたような記憶があるが、暑いのとリュックサックが重たかったことで、遠く感じたのかもしれない。姉はそのとき妊娠中で、義兄は姉の世話もしながらだったので、私と妹は自力でやるより仕方なかったのだ。

収容所での生活が四、五日ぐらいいったのか、一週間以上だったのか覚えていない。母と妹のことが気がかりで、気

もそぞろに暮らしていたが、ある日突然二人が病院から戻って来て、明日列車に乗ってそれぞれの故郷に帰るということを知らされた。

引揚者が乗って走る列車は「引揚げ専用列車」と呼ばれ、私たちは長崎県佐世保から東京の上野まで、同じ列車で移動した。大きな駅に到着すると、「引揚者の皆さん、お帰りなさい」というようなことが書かれた看板が掲げられていた。また、引揚者の世話をする人がたくさんいて「引揚げご苦労様でした」と声を掛け、水やお茶、弁当などのサービスをしてくれていた。広島を通るとき、新型爆弾が落ちて焼け野原であることを聞かされた。

八月十三日、私たちは遂に上野駅に着いた。

四 引揚げ後の生活

東京には、父方の祖母や叔母たちがいて、とりあえずそこに寄せてもらうことになっていたようだ。叔母が自宅以外に杉並区に大きな家を持っていて、我々のほかにも親戚の引揚者が住んでいた所に、私たちも部屋をもらって落ち着いた。

姉と義兄は、義兄が山形の出身だったので、妊娠八カ月

の姉共々そちらへ直行ということになり、上野で列車を見送り別れた。

祖母たちとの涙の対面もそこそこ、翌日病院に行った母と妹は即日入院となり、療養が始まった。母は、結核性の腹膜炎ということでお腹に水がたまり、臨月の人のような大きなお腹になり苦しそうだったし、妹は重症の百日咳ということで、新宿の国立第一病院ではそれぞれ別棟に入院させられた。それからの私は大変だった。毎日病院と家の往復をした。母や妹の洗濯物を運んだり、食料品を運んだり、今思うと自分ながらよくやったと思う。

後で分かったことだが、母の実家は北海道で、祖母と叔母が母の帰るのを待っていたのだが、東京で入院ということになったので、母と子供三人の生活費はすべて北海道の祖母が出してくれていたということだ。戦後二年経っていたが、まだ十分な食料があったとは思えない時期に、何とか生活できていたことを思うと、祖母たちの援助に頭が下がる。

母の腹膜炎は、お腹にたまった水を毎日取ってもまたすぐにたまる状態で、癒る見込みがないようなことを言わ

れた。それが、今度は東京の祖母の力で治癒したのだ。それは、祖母がどこからか聞いてきたのだが、ゆり根を煎じて飲むと水がたまらなくなると言うのだ。治す薬や注射が無いのならやってみようということになり、祖母がゆり根を買って来て、毎朝やかんいっぱい煎じた物を水筒に入れ、それを私が病院へ持って行くのだ。どれだけ飲ませただろうか。私たちの必死の看病が功を奏したのだろうか。ある時期から、母のお腹がしばみ始めたのである。そのときの嬉しさといったらなかった。祖母と手を取り合って喜んだ日のことが、忘れられない。医者が不思議がること不思議がること、おかしいくらいであった。今思うと、漢方薬のような煎じ薬が効果をあげたのだろうか。でも私はこういう生活の毎日で、九月に入って二学期が始まっても学校に行けず、ひたすら病院通いをしていった。

十月になった。母の病状が落ち着き、歩いたり列車に乗ったりするのにも耐えられるのを見定めて、寒くならないうちに北海道へ帰ることになった。妹の病状も落ち着いていた。満州にいるときに、父の教え子だった若い男性に付き添いを頼んで、十月中旬、私たち母子四人は、東京の祖

母や叔母やいとこたちにさよならをして北海道へ行くことになった。北海道と言っても、母の実家は最も遠い稚内である。引揚げ後二カ月を過ごした東京を後に、再び上野から列車に乗った。病身の母に十二歳の私と十歳と六歳の妹二人の四人を、父の教え子は大変親身に世話をしながら稚内まで送り届けてくれたのである。

稚内では、写真でしか会ったことのない母方の祖母を始め、叔父夫妻に三人の小さいいとこが住んでいる家に一室をもらい、落ち着くことになった。北海道は既に秋も深まってきたところであった。祖母の家は宗谷海峡の海に面した所にあり、米、酒、タバコなどを始め、食料品やちよっとした雑貨も商う店を経営していた。隣近所は漁師の家が多く、親戚(母の叔父や叔母・いとこなど)もいた。どこの家の前も広い砂浜で、よく昆布が干されていたことを覚えていた。

私は引揚げ以来、初めて学校に行くことになった。しかし、小学校はすぐ近くにあったが、中学校は峠一つ越えた町まで行かないと無かったため、かなりの距離を歩かなければならなかった。何キロメートルぐらいあったのだろうか、

慣れない通学に私は半泣きだった。特に冬になってからはひどかった。雪や冷たい霧が降ったりすると、手足は冷たく時間はかりかかって、本当に泣きながら通学した。つい学校も休みがちになった。

これではしょうがないと母たちが相談して、稚内から列車で一時間ほどの沼川という所に住んでいる叔母の所に、私だけ預けられることになった。そこは稚内より小さな町であったが、学校が近くにあり、翌年から私はその町の中学校に転校した。この中学校は田舎の小さな学校であったが、教師も友だちも優しく、私は都会から来た生徒として扱われ、短い期間であったが、楽しい思い出も残っている。

北海道に帰ってからの母は、みるみる体力を取り戻し、元の元気な母になっていった。母はこれからの生活の仕方をいろいろ模索していた。母は若いときに看護師・助産師の経験があり、その資格や技術を生かすべく準備した。保健機関に相談し、再教育も受け、諸器具を用意して、助産師(当時は産婆さんと言っていた)の看板を掲げることができた。多分三月ころだったと思う。へんびな所だったせい

か逆に依頼が多く、早速に忙しい日々が始まっていた。

私は春休みには母のもとに帰っていたが、四月には叔母の所に戻って、中学二年生の生活が始まった。叔母の家には、私より一歳年下のいとこを頭に四人のいとこがいて、学校から帰ると、一番下の子のお守りをするのが私の仕事だった。背中に赤ん坊を背負って好きな本を読んでいた光景を、今でもときどき思い出す。

ところが、こういう北海道の生活がある日突然終わりになった。母の転職であった。母の助産婦としての仕事は順調に続いていたのだが、なぜそれをやめてまで次の仕事に変わったのかは、今思うと私のこともあったと思う。母としては、やはり母子四人が一緒に暮らすこと、できれば祖母や叔母の世話にならずにということだったのだろう。父の勤めていた満州航空にいた人で、当時千葉県の鴨川町にある鴨川化工株式会社工場の工場長をしていた人が、その工場で働く技術者たちの住む寮の寮母を探しているが、ここで働かないかと言ってきたのだ。母には戦後の満州で寮母の経験が既にあつたことを考えると、そんなに突飛な話ではない。その工場長の誘いで母が決心することになった

第一の理由は、鴨川という土地が温暖で、冬暖かくオーバーがいらぬということであった。それは、身体があまり丈夫でない三人の子供たちのためにも、良い条件と考えたのだろう。もちろん寮には一家が暮らす部屋があり、子供三人を食べさせていくことが可能だということでも決断したのだと思う。祖母は反対はしたが、詳しいことは私にはよく分からなかった。祖母たちと別れて、まだ一度も行ったことのない千葉県の鴨川町という所へ、母子四人は再び列車に乗って移って行ったのである。昭和二十三年六月のことであった。

私たちの新しい生活が始まった所、千葉県安房郡鴨川町は、房総半島の突端に近い太平洋に面した半漁半商の町であった。私は地元元の鴨川中学校の二年生に、妹たちは小学校六年生と三年生にそれぞれ編入した。母が寮母をして働くことになったのだが、朝夕は私たちも忙しかつた。母が寮生の食事の支度や後片付けなどするのを手伝うのが、私や妹の仕事だったからだ。また寮には広い庭があつたので、母は菜園を作るほかに鶏を飼うことも考えたのである。かなり大きな鶏小屋を作り、常時二十〜三十

羽の鶏を飼っていた。卵はもちろん、たまには鶏肉としても活用されたのである。卵がたくさんあるときは、近くの商店に持って行き、引き取ってもらった。私と妹は、朝起きると鶏小屋の掃除と餌をやるのが仕事となり、それが済まないで学校に行けなかった。でも鶏糞がたまって、それを農家の人に引き取ってもらうようになってからは、それが私たちの小遣いとなるので頑張って働いたことも、今思い出すと懐かしい。その間に、私がマラソン大会の後に足が腫れ、蜂窩織炎という病気になる、それが悪化して骨髄炎となり、長い病院生活を余儀なくされたのである。また、下の妹が体調を崩し入院した。小児結核であった。私の入院の繰り返しもあって、母がどんなに苦勞していたかを思い出すだけでも胸が痛くなる。

そういう中で私は中学校を卒業し、高校入試を経て高校に入学していたのだが、妹の長期入院もあって、その病院の先生から私に看護婦になって働かないかと誘われた。学校には通いたかったが、考えた結果、高校を退学する決心をした。担任の教師に話しに行ったら、「学校をやめるのはいつでもできる。妹さんの病気が良くなればまた

学校に来れるんだから、このたびは休学にしておきなさい」と諭されて、一学期が終わったところで一年間の休学をとり、病院で働くことになった。

ただちに看護学の研修を受け、秋には准看護婦の資格を取得した。私の担当の病棟ではなかったが、毎日妹と接することができ、母も安心したようだった。勤めは私にとつてあまりつらいこともなく、同年齢の仲間もいて楽しい生活だった。

しかし翌年五月、妹は私たちの願いも空しく、十歳の短い生涯を終えたのだった。小さな柩を、母が焼き場に運んで行った後ろ姿を思い出すと、今でも涙が出そうになる。私は働く意欲を無くし、ちょうど虫垂炎になったのをきっかけに、七月いっぱい病院勤めをやめ、高校生としての生活を復活させた。このときほど、休学を勧めてくれた担任教師に感謝したことはない。

満州での敗戦時から、引揚げ、転校、病気、入院、休学と、小学校五年生から高校一年生まで、満身に学校に行っていなかった私である。何もかも遅れていたが、もともと勉強が嫌いでなかったたので、初めて落ち着いた学校生活が

始まって、母と妹と三人の生活は、朝夕の食事の支度と鶏の世話で相変わらず忙しかったが、私はとても充実していた。足が悪かったので、体育は見学であったが、ほかの科目は何とか追いついて、高校二年が終わるころには大学受験も考えるようになった。母は私の勉強好きを知っていて、私立大学にはとてもやれないが、国立大学なら東京に親戚の家もあるし、何とかなるだろうと楽観的であった。私は高校生活も奨学金をもらっていたので、大学もそういう形で行くことができると思いい、私なりの受験勉強で昭和二十九年春、国立大学二期校を受験し、無事合格して教員になるための大学生活を始めたのであった。東京では、引揚げて来たとき世話になった叔母の家に居候し、母が毎月食費を送ってくれた。

私は奨学金をもらい、それを月謝に充当し、家庭教師のアルバイトをして小遣いとした。ちなみに当時の国立大学生活中、春、夏、冬の休みはただちに鴨川に帰って母を手伝った。私がいなくなつて妹が一人いたのだが、一年後に妹も東京に就職したので、鴨川に母一人となつていた。妹はとにかく、私にはまだ仕送りが必要だったのだ。母はそ

のことについて、一度も愚痴や文句を言ったことがない。そのころの私は、それを当たり前のように思っていたが、女人の働きで子供を大学に行かせることがどんなに大変なことであつたかを、大人になつてその有り難さをしみじみ感じたものである。

私は昭和三十三年三月、無事大学を卒業し、同年から東京都の公立小・中学校の教員として勤務し、平成七（一九九五）年三月まで三十七年間の教員生活を全うした。

母は、昭和三十三年六月に鴨川に来て以来昭和三十年三月まで、寮母として働き続けた。その間に私の病気が、母本人も重病を経験している。無理がたたつていたのだと思うが、脊椎カリエスになり、昭和三十二年ごろは入院・手術で大変だった。

母は、引揚げのときも重い腹膜炎だったのに回復したが、今回も全快は難しいと言われたのに奇跡的に全快し、その後六年間も勤めを続けている。

寮母をやめることになつたのは、母の本意ではなかった。

当時既に結婚していた私が出産を控えていて、働いている私としては、母に家に来てほしかったのだ。母はまだ六十歳になっておらず、もう少し働きたかったようであるが私の希望を入れて、十七年間住んだ鴨川を後にしたのだ。

それからの母は、私の家で私の二人の娘の世話や面倒をみて暮らした。五十七歳から八十九歳まで私は共に暮らしたが、その間は我が家の主婦として、育児はもちろん、料理、洗濯、掃除一切を引き受け、子供たちにはかなりの教育ばあさんとして君臨した。料理は得意中の得意だったので、私たち家族は幸せだった。趣味はゲートボール・旅行などであった。私の長期の休みには、必ず自分の母や弟のいる北海道へ帰った。

母は若いとき、看護師や助産師として働いた時期もあるが、女流飛行士として空を飛んだこともある人であった。自分の力で働き、学び、自分のやりたいことをやる、自立し、進取の気性あふれた女性であった。敗戦のあの混乱の中で家族を守り、引き揚げて来てからも、自分も病気をしながらも残された三人の子供を守り育てたその気力、迫力に、私は到底追いつけないと思っている。

終戦当時のことはよく話し合ったが、母は必ず「あのときは夢中だったのでやったけど、今ならできないね」と笑っていた。苦勞したのは母だけでなく、当時の人は大なり小なり苦勞しているのだが、子供だった私の苦勞など、母の苦勞に比べたら物の数に入らないと思うこのごろだ。

母は平成八年の年末に八十九歳で亡くなったが、亡くなるまで元気で、入院もほんの四、五日であった。最後まで意識もしっかりしていて、自分がいなくなった後の我が家のことを心配していた。よほど私が頼りなく見えていたのだろう。私の心の中には今も母が生きていて、私はやっぱり母に頼っている。

ここまで記録してきて思うことは、二度と再び、このようならぬ経験をだれにもさせたくないということである。つまり、戦争は絶対に許さないということである。今の平和を守り、日本だけでなく世界中が平和であるようにと、心から祈っている。

